

「いざという時」が来た（続）

7月9日レポートで「いざという時」が来たという、憲法学者・樋口陽一先生の言葉を伝えた。『現代思想』8月号「戦後70年」特集の対談「憲法の前提とは何か」の中で、樋口先生は戦前と現在を次のように語っている。前回のレポートの続きとして紹介したい。

8000万の民衆が着地点もわきまえぬままに流されていった戦前のことを忘れるべきではありません。私自身、太平洋戦争が開戦した12月8日のことはよく覚えているのですが、終戦の8月15日のことは、逆に記憶にないのです。そのときは国民学校5年生で、私は「学徒隊」副小隊長（級長）でしたが、おそらく思考停止に陥っていたのでしょう。もはや何が起きて、驚きも喜びもない状態でした。逆に国民学校1年生で迎えた12月8日には、非常に強い恐怖を感じたことを記憶しています。それは、たとえば講談社の絵本を買ってもらえるような程度の家庭であれば、アメリカがどれだけ大きな国か、子どもでもわかっていたからです。巨大な摩天楼が立ち並ぶあいだを自動車が走り、国のなかを飛行機が飛び交っている。普通にものを考える人間であれば、とんでもないことになったことがわかったはずです。

しかし、それがどんどん思考停止に陥っていく。教育においても、知的なものが意味をなさなくなり、兵士になるための体力と敏捷性だけが求められる。まともな恐怖感をもっていただけの子どもが、何も感じない少年に成長していった。その過程には、いま振り返っても慄然とします。どんなに酷い状況であっても、それに慣れなければ、人間は精神の均衡を維持できななのでしょう。

こうした戦前の状況に極めて近いところまで、いまの日本社会は近づいていると感じています。さらに悪いことに、この二つの社会を比べてみると、戦前の場合は、少なくともある程度の期間は抵抗の拠点となったエスタブリッシュメントが存在しました。たとえば帝国海軍の半分、あるいは親英米の財界人、帝国大学の教師と学生といった人びとです。しかし、そうした部分はいまや存在しません。それだけでなく、僅かに残された抵抗の拠点ですら、いままさに壊されつつある。内閣法制局、日本銀行、日本放送協会、さらには国立大学の文系学部までが、事実上解体の危機に瀕しています。そういう



意味で、戦前よりも憂慮すべき事態が進行しているのです。

しかし、かつては存在しなかった SEALDs のような人びとが存在する。自分の言葉で主張をしている若い人たちの顔は、間近で見ると輝いていました。だから「あなたたちの輝いている顔を見て、日本の将来について自信を取り戻した思いだ」とスピーチしたのは、本心からのことなのです。これは戦前との大きな違いだと思います。

(2015年8月8日)